

研究

母親の乳幼児に対するミラーリングと
言語発達との関連について

井手裕子

〔論文要旨〕

本研究の目的は、母親のミラーリング（形態と頻度）の変化と、乳幼児の言語発達時期との相関を検討することである。

対象は、乳幼児健診を受診した母親559名である。質問紙により、「実況」、「代弁」、「注意」、「模倣」のミラーリングと、「発声」、「指さし」、「発語」等の発現時期を調査した。その結果、乳幼児の月年齢が上がるにつれ、母親の「注意」が増加し、「模倣」は減少した。ミラーリングの頻度と言語発達時期について、生後3か月で「実況」、「代弁」と「人へ声を出す」発現時期との間に有意な負の相関が、24か月で「注意」と「心配行動」、「いたわり行動」の発現時期との間に負の相関が認められた。18か月では「注意」、「実況」、「代弁」と「母親の要求に子どもが返答する」発現時期、「注意」、「実況」と「共同注意」の発現時期との間に有意な正の相関が認められた。このことから、ミラーリングの頻度は、言語発達と関連性を持ち、母親のミラーリングは、乳幼児の言語発達の敏感な時期に特に有用であることが示唆された。

Key words : ミラーリング, 母子関係, 乳幼児, 言語発達

I. 問題と目的

ミラーリングとは、Winnicott¹⁾が、多くの母親が日常的に行っている乳児に対する関わりについて説明したものであり、母親が共感的な調子合わせをする時に、幼児の表情、身体の姿勢、動き方、お喋り、他の音などを直感的にまねる行動のことをいう。Trevarthen²⁾は、これらの無意識的行動を‘echo (こだま)’のような反応と記述し、mirroring (鏡映化)と同義と捉えた。Stern³⁾は、直観的なまねに加え、養育者が乳児の行動に現れる情動を察し、情動状態を模倣する情動調律としての役割、すなわち児と同じ知覚様式内での働きかけとしての乳児への模倣や焦点付け行動³⁾と定義している。また、鯨岡^{4,5)}は、母親が乳児の気持ちの

動きをつかんだ状態を「成り込み＝一体化」⁴⁾と表現し、情動状態の共有として機能する重要な関わりと捉えている。その他にも感情の協応⁶⁾、情動鏡映^{7,8)}、調律的応答⁹⁾等、一般的な親の子どもに対する行動の特徴を記述する概念としてさまざまな用語で記述されているが、そのどれもが「ミラーリング」について示されたものである。

このような情動状態を共有しながらの模倣や焦点付けといった情動鏡映の定義を、行動レベルで具体的に定義付けたのがLegersteeら⁷⁾、Legerstee⁸⁾である。彼女らは、ミラーリングを、attention maintenance (注意維持)、warm sensitivity (あたたかい感受性)、social responsiveness (社会的応答)の特徴を持つ関わり状態とした。すなわち、“注意維持”は、「あな

On a Relationship between Maternal Affect Mirroring to Infants and Their Language Development

[2748]

Yuko Ide

受付 15. 7. 7

名古屋大学教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士過程後期心理危機マネジメントコース (大学院生 / 臨床心理士)

採用 16. 4. 17

別刷請求先: 井手裕子 名古屋大学教育発達科学研究科 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

Tel : 052-789-2655

たのソックスを見て！かわいいソックスよ」等の乳児の注意をひくための関わりを，“あたたかい感受性”は、子どもの感情の適切に映し返し、乳児の興味の受け入れ、身体的感情の程度や肯定的な感情、声のトーンを表す感受性を，“社会的応答”は、子どもの微笑と発声への模倣の応答や否定的な感情の調整を示すものである。彼女らは、これらの情動鏡映のレベルの高い母親をもつ3か月齢児は、母親へ注意を向けやすく、母親への社会的期待が高く、社会性や母親を認識する能力の発達に影響することを示唆した。そしてこの定義をもとに行った縦断研究¹⁰⁾において、3か月時に調律（ミラーリング）行動が高群の母親の子どもは、低群の母親の子どもに比して、母親への注視、母親への微笑の映し返しがみられ、月齢とともに注意の共有が増大し、見知らぬ女性との協応的注意が多いことを示した。この結果について Legerstee⁸⁾は、母親の行動が子どもの注意能力の発現に対して適切な足場づくりとして機能したことが、共同注意の発達にプラスの効果を与えたからではないかと述べている。

これらの知見をふまえ、発達臨床の現場においてミラーリングが有用される可能性を述べた研究がある。例えば、ミラーリングの一部と思われる大人側からの模倣の効果は、自閉症児の注目や応答性の喚起^{11,12)}の観点と、母子関係によるコミュニケーションの発達^{13,14)}の観点の2側面から研究されている。前者に関して、Nadelら¹¹⁾は、定型児との比較において、自閉症児は、母親に模倣されることによって母親を注目しやすいくという結果を示し、Fieldら¹²⁾は、大人が自閉症児の行動を模倣することによって、自閉症児の大人への接近、接触といった社会的行動が増加することを示した。これらは、大人の模倣による自閉症児の社会的コミュニケーション発達の可能性を示唆している。

後者の研究として、伊藤ら¹³⁾は、母親が関わることによって自閉症児との共感関係が確立し、それが自閉症児の自他認識を発達させ、言語発達にも影響を与えたとした。また、Sillerら¹⁴⁾は、子どもの注意の方向を感じ取る自閉症児の養育者の敏感な関わりが、子どもの共同注意といったコミュニケーションの発達に影響するという知見を示すなど、情動交流の重要性を示唆している。加えて井手¹⁵⁾は、このような母子の情動的な交流としてのミラーリングの重要性に注目し、保健センターの健診後、事後教室で推奨されたミラーリングを、言語発達に遅れをもつ子どもの母親が実行し

た結果、子どもの語彙数が増加するとともに、コミュニケーションが発展することで母親の心が安定し、育児への意欲へつながった事例を通して、ミラーリングと言語発達との関連性を示した。

以上のように、大人の模倣の効果や臨床的なアプローチの研究はある程度示されている。一方で、ミラーリングは、単なる母親の模倣でなく、前述したように、行動の模倣の根底に情緒的な鏡映が含まれる、広範囲の母親行動である。しかし、その前提となるミラーリングの基礎的な特徴や発達の関わりの変化等を記述した実証研究や、共同注意や言語発達を含むコミュニケーションの発達との関連性に関する実証研究は稀少である。そこで本研究では、子どもの言語発達に関する介入方法の可能性として“ミラーリング”に焦点をあて、ミラーリングの定義を Legersteeら⁷⁾、Legerstee⁸⁾に準拠し、母親がミラーリングをどのように行っているかの実態を横断的に調査し、発達に応じた変化と共同注意や言語発達との関連性を検討したい。

II. 方 法

1. 調査対象者と調査方法

本研究は、所属（名古屋）大学研究倫理審査の承認を得たうえで調査を開始した。

期間は、2013（平成25）年1～3月であった。〇市保健センターの0か月～2歳までの子どもをもつ健診予定の保護者768名を調査対象とし、このうち559名から協力を得られた（回収率71.09%）。調査対象者内訳は、3か月児健診155名、6か月児健診141名、1歳6か月児健診135名、2歳3か月児歯科健診115名であった。

調査方法は、研究の主旨、自由意思での提出であるという文章を加えた依頼文、質問紙を乳幼児健診の案内書に同封して郵送し、健診当日、健診に訪れた対象者に回収ポストに入れてもらうよう依頼し、回収した。質問紙は、母親のミラーリングについて問う項目と、子どもの言語発達について問う項目で構成したものを使用した。ミラーリングについて問う項目は、Legersteeら⁷⁾が母親のミラーリング行動として定義した、“注意維持する言葉かけ”、“あたたかい感受性”、“社会的応答”に沿って抽出した「実況」（お子さんの状態について実況中継するように言葉をかける）、「代弁」（お子さんが、感じているだろうことを想像して代わりに言う）、「注意」（お子さんに見てほしいもの

表1 共同注意, 言語発達の質問項目

質問項目	使用月齢			
	3か月齢	6～9か月齢	18か月齢	24か月齢
「あー」、「うー」など人に向かって声を出しますか(人への声)	○	○	—	—
「あー」、「マンマン」など(喃語)でおしゃべりしますか(喃語)	○	○	○	○
あなたがおもちゃを指さすと、その方向を見ることがありますか(母親指さし見)	—	○	○	○
指さしはしますか(子ども指さし)	—	○	—	—
お子さんが指さしする時、確かめるようにあなたの顔を見ますか(子ども指さし確認)	—	○	○	○
あなたが見たり、指さしたりしている「もの」を見て、その後確かめるようにあなたの顔を見ることがありますか(母親指さし顔確認)	—	—	○	○
お子さんがほしい「もの」がある時、自分からそれを指さして要求することがありますか(子ども指さし要求)	—	—	○	○
何かに興味を持ったり、驚いた時、それをあなたに伝えようと指さしすることはありますか(子ども共同注意指さし)	—	—	○	○
お子さんが持っているものを「ちょうだい」と言うと、見せてくれたり、渡しますか(母親要求子ども返答)	—	—	○	○
お子さんが自分から、おもちゃなどを差し出して、あなたに渡したり見せてくれることがありますか(子ども共同注意)	—	—	○	○
誰かが、指を傷つけたりお腹がいたい時、その人を心配そうに見ることがありますか(心配行動)	—	—	○	○
上記で心配そうに見る時、なぐさめたり、いたわるような行動をすることがありますか(いたわり行動)	—	—	○	○
あなたの話す音声やことばをまねようとしますか(まね音声)	—	○	○	○
意味のあることばを言いますか(発語)	—	—	○	○

への注意を向けるようながす),「模倣」(お子さんのしぐさ(言葉)のまねをする)の4つの項目について、6つの生活場面(起床場面、食事場面、おむつ替え場面、着替え場面、入浴場面、遊び場面)ごとに回答を求めるものであった。項目数は24項目であり、回答は6件法で求めた。

子どもの具体的な言語発達を問う項目については、黒木ら¹⁶⁾の標準化された共同注意と言語発達の行動項目表の中から、対象月年齢に合わせた行動項目を抜粋し、その出現時期について回答を求めた。質問項目は、3か月齢では「人への声」(「あー」、「うー」など人に向かって声を出しますか)、「喃語」(「あー」、「マンマン」など(喃語)でおしゃべりしますか)、6か月齢では「母親指さし見」(あなたがおもちゃを指さすと、その方向を見ることがありますか)、「子ども指さし」(指さしはしますか)などである。このような質問項目を発達に応じて加えながら0～3か月齢児用、4～6か月齢児用、1歳児(16か月～)用、2歳児用の4種類を作成し、3か月児健診では0～3か月

齢児用を、6か月児健診では4～6か月齢児用を、1歳6か月児健診では1歳児用を、2歳3か月児歯科健診では2歳児用を使用した。具体的な質問項目は、表1に記述した。

2. 分析方法

①上記の6場面の4種類のミラーリング頻度を表す24項目すべてを合計し、1項目あたりの平均値を算出したものを「ミラーリング総合得点」と命名した。②6場面それぞれについて4つのミラーリング頻度を合計し、平均値を算出したものを、6場面得点とし、それぞれ「起床場面得点」、「食事場面得点」、「おむつ場面得点」、「着替え場面得点」、「入浴場面得点」、「遊び場面得点」と命名した。③ミラーリングの「注意」、「実況」、「代弁」、「模倣」の各得点を6場面合計し、平均値を算出したものをそれぞれ「注意得点」、「実況得点」、「代弁得点」、「模倣得点」と命名した。発達による差異を検討するため、①～③について月年齢グループの一要因分散分析を行った。また、ミラーリングの

表2 ミラーリング得点の月年齢グループ別比較 (一要因分散分析)

	年齢								F 値	多重比較
	3か月齢		6か月齢		18か月齢		24か月齢			
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
4種類のミラーリング得点										
注意得点	4.63	1.07	5.01	.88	5.30	.72	5.28	.63	18.97**	3M<6M, 18M, 24M 6M<18M
実況得点	5.11	.95	5.20	.74	5.15	.75	5.21	.69	.48	
代弁得点	5.30	.87	5.38	.62	5.24	.68	5.31	.61	.97	
模倣得点	5.11	1.04	5.02	.96	4.74	1.09	4.56	1.11	7.50**	3M>18M, 24M 6M>24M

SD: 標準偏差, 3M: 3か月齢, 6M: 6か月齢, 18M: 18か月齢, 24M: 24か月齢 $p < .01^{**}$

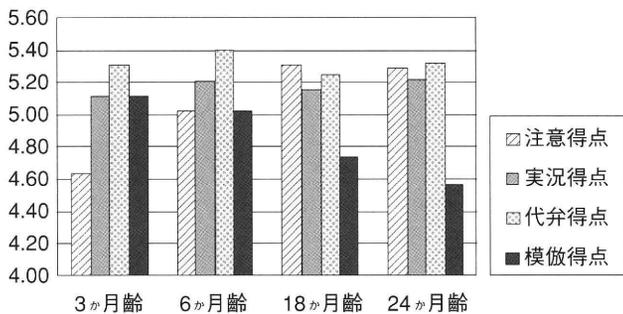


図 ミラーリング得点の月年齢グループ別比較

で有意差が確認された。多重比較したところ「注意得点」は、3か月齢に比して、6か月齢、18か月齢、24か月齢が有意に高く、さらに6か月齢に比して18か月齢が有意に高いというように、月齢の高い方が、得点が高いとする結果が得られた。これに対して、「模倣得点」は、3か月齢が18か月齢、24か月齢に比して有意に高く、6か月齢が24か月齢に比して有意に高いというように、月齢の低い方が、得点が高いとする結果が得られた。結果を表2と図に示す。

頻度と言語発達時期の関連性を検討するため、①～③と、言語発達（発声、発語）、共同注意（母親が指さすものを見て母親の顔を見る「母親指さし顔確認」、「心配行動」、「いたわり行動」等）の発現した時期の相関を分析した。

Ⅲ. 結 果

1. 年齢差の検討

- ① 「ミラーリング総合得点」について月年齢グループの一要因分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった。
- ② 6場面得点（「起床」、「食事」、「おむつ」、「着替え」、「入浴」、「遊び」）について月年齢グループの一要因分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった。
- ③ 4種類のミラーリング得点（「注意得点」、「実況得点」、「代弁得点」、「模倣得点」）それぞれについて月年齢グループ間で比較するため一要因分散分析を行った結果、「注意得点」($F(3,542) = 18.97, p < .01$)、「模倣得点」($F(3,542) = 7.50, p < .01$)の2種類

2. 4種類のミラーリング得点と言語発達時期の相関

月年齢グループ別に、4種類のミラーリング得点と言語発達（共同注意）が発現した時期との相関を検討した。その結果、3か月齢では、「実況得点」($r = -.24, p < .01$)、「代弁得点」($r = -.26, p < .01$)と「人へ声を出す」発現時期との間に、有意な弱い負の相関が認められた。6か月齢では、有意な相関は認められなかった。18か月齢では、「注意得点」($r = .50, p < .01$)、「実況得点」($r = .42, p < .05$)と、「母親の要求に子どもが返答する」発現時期との間に有意な強い正の相関が、「代弁得点」と、「母親の要求に子どもが返答する」発現時期との間に有意な弱い正の相関 ($r = .35, p < .05$) が認められた。また、「注意得点」($r = .36, p < .05$)、「実況得点」($r = .36, p < .05$)と「子どもの共同注意」発現時期との間に有意な弱い正の相関が認められた。24か月齢においては、「注意得点」と「心配行動」の発現時期との間に有意な負の相関 ($r = -.41, p < .05$) が、「注意得点」と「いたわり行動」の発現時期との間に有意な負の相関 ($r = -.40, p < .05$) が得られた。これらの結果を表3に示す。

表3 月年齢グループ別ミラーリング得点と言語発達（共同注意）時期の相関

	3 か月齢				6 か月齢				18 か月齢				24 か月齢							
	n	注意	実況	代弁	模倣	n	注意	実況	代弁	模倣	n	注意	実況	代弁	模倣	n	注意	実況	代弁	模倣
人への声	124	-.13	-.24**	-.26**	-.10	92	.02	-.02	.02	-.07	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
喃語	30	-.17	-.24	-.35	-.31	54	-.12	-.03	-.11	-.11	62	.14	.14	.17	-.10	42	-.09	-.16	-.17	-.16
母親指さし見	-	-	-	-	-	39	-.10	.11	-.03	-.12	39	.02	.10	-.12	-.24	25	.01	-.18	-.19	.16
子ども指さし	-	-	-	-	-	3	.96	.98	.96	.97	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
子ども指さし確認	-	-	-	-	-	3	.50	.10	.10**	.87	35	.05	.06	.00	.00	21	-.09	-.18	-.11	-.07
母親指さし顔確認	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	36	-.03	.13	-.13	-.30	20	.18	-.10	.06	-.01
子ども指さし要求	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	47	.01	.17	.00	-.20	25	.07	-.09	-.12	.02
子ども共同注意指さし	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	37	.02	.08	-.01	.06	22	.00	.02	.01	.02
母親要求子ども返答	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	43	.50**	.42*	.35*	.22	25	-.30	-.26	-.20	-.06
子ども共同注意	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	37	.36*	.36*	.18	.25	23	-.26	-.13	-.14	.01
心配行動	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	41	.15	.14	-.07	.06	31	-.41*	-.27	-.29	-.12
いたわり行動	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	35	-.01	.05	-.10	-.19	29	-.40*	-.24	-.31	-.16
まね音声	-	-	-	-	-	7	.36	-.03	.33	.38	36	.12	.16	.25	-.08	29	-.04	.05	-.05	-.15
発語	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	45	.19	.16	.24	.24	33	-.23	-.19	-.16	-.18

**p<.01, *p<.05

IV. 考 察

1. ミラーリングの特徴

i. 年齢と関わりの変化

ミラーリング全体得点について、年齢的な差は認められず、調査対象の母親は、総じてミラーリングを行っているということが示された。4種類のミラーリング得点ごとに見ていくと、「実況得点」、「代弁得点」は、全月年齢で変化はみられないものの、月年齢が上がるとともに「注意得点」は増加傾向を、「模倣得点」は減少傾向を示し、母親の関わりが子どもの発達とともに変化することが示唆された。

3か月齢児の母親は、「模倣得点」において18か月齢、24か月齢児の母親より有意に高く、「注意得点」は他の月年齢に比して有意に低かった。「注意」が主体的な働きかけであるのに比して、「模倣」とは、Trevarthen²⁾が“つき従う者としての反応”と述べたように、子どもの行動、声、表情に対する受動的な反応である。すなわち、母親が受動的に子どもと同様の行動をすると、子どもは自分と同じ行動をする母親の表情や身振りに注目しやすく、それを見た母親がまた関わるという相互交流の契機となる。この時期の子どもは、母親への働きかけが、微笑、凝視、クーイング等、非言語的であることから、「模倣」は、子どもの働きかけのレベルに合わせた、母親からの非言語的関わりとしての役割を果たしていることが考えられる。加え

て、Trevarthen²⁾にて「模倣」はコミュニケーションを維持する役目を果たすとされていることから、本研究結果において「模倣」が当該月齢の子どもにとって、受動的で非言語的な関わりとして有効なことが示唆されたといえる。

加えて、この時期の母親の「注意」が少ないことに関しては、言語を理解しないこの時期の子どもが、まだ母親の「注意」へ反応することが少ないためではないかと思われる。

一方、18か月齢、24か月齢児の母親は、「注意得点」において、3か月齢、6か月齢児の母親より高い傾向を示した。この時期は、子どもの言語発達がなされ、それ以前より言葉を介した意思疎通が増えるため、母親は、子どもとの関わりの中で、共有を示す言葉かけとして、「これを見て」など注意を喚起する言葉かけを多く行うようになると考えられる。また、共同注意の発達が完了する時期¹⁶⁾でもあり、母親は、共同注意が可能になった子どもの状態に合わせ、注意喚起を多くするように変化したと思われる。

また、18か月齢と24か月齢児の母親の「模倣得点」は、3か月齢や6か月齢児の母親より低いことが示された。小椋ら¹⁷⁾は、18か月齢児より24か月齢児の母親の言語模倣が有意に多くなるとしているが、小椋ら¹⁷⁾で増加したのは、子どもの発話の拡充模倣であり、本研究で調査した、子どもの言動や行動をそのまままねする繰り返しの「模倣」とは異なる。よって、本研究

の「模倣得点」の減少とは矛盾しないものと考えられる。

ii. ミラーリングと言語発達時期との関連

本研究の結果、3か月齢で、「実況」、「代弁」の頻度が高い母親の子どもは、「人へ声を出す」時期が早く、24か月齢では、「注意」喚起の頻度が高い母親の子どもは、「心配行動」、「いたわり行動」の出現が早いことが示された。これは、母親のミラーリングが、3か月齢では人に対して声を発することに反映される言語発達を促進させ、24か月齢では共同注意の発達である、母親を心配する行動やいたわる行動の出現を促進させることが示唆される。3か月齢の「人へ声を出す」、24か月齢の「心配行動」、「いたわり行動」は、黒木ら¹⁶⁾の言語発達と共同注意の発達指標とも合致する重要な発達課題であることから、3か月齢と24か月齢においては、ミラーリングは言語発達や共同注意の発達に有用な側面を持つ可能性が示唆されたと考えられる。加えて、「心配行動」や「いたわり行動」について、黒木ら¹⁶⁾は、自分と異なる他者理解が発達する時期(14~24か月頃)に発達すると述べていることから、今回24か月齢時にミラーリング頻度との関連性がみられたことは、ミラーリングが子どもの他者理解を促す可能性も考えられ、今後の課題として関連性の検討が望まれる。

一方、18か月齢では、母親の「実況」、「代弁」、「注意」の頻度が高いほど、「母親の要求に子どもが返答する」発現時期が遅く、「実況」、「注意」の頻度が高いほど「子どもの共同注意」発現時期が遅くなることが示された。これは、他の月年齢と逆の関連を示すものであり、この月年齢では、可能性として、母親のミラーリングが、子どもの共同注意の発現を遅らせる、または子どもの共同注意の発達の遅さが母親のミラーリングを促進させるということが考えられる。

以上の、3、24か月齢時の言語発達との関連と18か月齢時での関連の相違を考えてみると、これら3つの時期における母親のミラーリング頻度の差はないことから、18か月齢時に、言語に関する子どもの発達の、あるいは母親の関わりの質的な、それらを含む相互的な交流に何らかの変化が起きるということの意味する可能性があり、18か月齢時と他の時期との相違の解明は、今後の課題として検討する必要があると考えられる。

また、ミラーリングの「模倣得点」は言語発達時期

との関連は示されず、「実況得点」、「代弁得点」、「注意得点」で有意な関連性が示されたことから、言語発達との関係において有効なミラーリングは、「模倣」ではなく「実況」、「代弁」、「注意」であるといえるであろう。特に「注意」に関して、Brunner¹⁸⁾は、母子の日常的な遊びを通した相互作用は、初期の頃から子どもの注意を維持する役目を果たすとし、Legersteeら¹⁹⁾においても、親が物の名前を言う時に子どもの注意を維持させるほど、子どもの参照的コミュニケーションが多くなることが示されているなど、「注意」と言語発達との関係²⁰⁻²²⁾が多く示されていることから、今後とも、より精密な検討が望まれる。

2. 臨床への応用

本研究で明らかになった母親のミラーリングは、単なる模倣やオウム返しではなく、子どもの発達に合わせて増減するという特徴があった。このことは、母親が子どもの反応を汲み取り、どう返すかという、交流や発達促進的な要素が、子どもへのミラーリングに反映されていたといえる。そして、このような関わりの質と頻度の高さが、子どもの言語発達を早めるという可能性も示唆した。上記の知見は、子どもの言語発達促進の有効な手段の1つとなるため、言語発達促進プログラムの中に、わかりやすく導入することが望まれる。

V. 結 論

1. 母親のミラーリングの発達の变化について、乳幼児の月年齢が上がると「注意得点」が増加し、「模倣得点」は減少した。
2. ミラーリング頻度と言語発達(共同注意、指さし、言語出現の時期)との関連は、言語発達時期との相関として、18か月齢で正の相関が、3か月齢、24か月齢で負の相関がみられた。このことから、3か月齢、24か月齢時の言語と共同注意の発達にはミラーリングが有用であることが示唆された。

本研究で得られた成果をもとに、プログラム開発を行いたい。それに伴い、本研究で言語発達時期と正の相関を示した18か月齢の様相の検討と、本検討で得られなかった9、12か月齢時の、ミラーリングが言語発達に及ぼす効果について、母子観察によって検討することが今後の課題である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力くださったお母様方、保健センターのスタッフの皆様には深く感謝いたします。また、適切なご指導を頂きました名古屋大学大学院教授 氏家達夫先生をはじめ、貴重なご意見、ご助言を頂きました諸先生方、研究室の皆様には厚く御礼申し上げます。

この研究は、日本教育心理学会第56回総会（神戸、2014年）において発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Winnicott DW. The theory of the parent-infant relationship. *International Journal of Psychoanalysis* 1960 ; 41 : 585-595.
- 2) Trevarthen C. Communication and cooperation in early infancy : a description of primary intersubjectivity. *Before Speech*, Cambridge University Press, 1979 : 321-347.
- 3) Stern D. The interpersonal world of the infant. New York : Basic 1985. スターン, 小此木啓吾, 丸田俊彦監訳, 神庭靖子, 神庭重信訳. 乳幼児の対人世界 (理論編/臨床編). 岩崎学術出版社, 1989.
- 4) 鯨岡 峻. 関係発達論の展開 : 初期「子ども一養育者」関係の発達の変容. ミネルヴァ書房, 1989 : 145-250.
- 5) 鯨岡 峻. 原初的コミュニケーションの諸相. ミネルヴァ書房, 1997 : 83-128.
- 6) Spitz R. Hospitalism : An inquiry into the genesis of psychiatric conditions in early childhood. *Psychoanalytic Study of Child* 1963 ; 1 : 53-74.
- 7) Legerstee M, Varghese J. The Role of Maternal Affect Mirroring on Social Expectancies in Three-Month-Old Infants. *Child Development* 2001 ; 72 (5) : 1301-1313.
- 8) Legerstee M. INFANTS' SENSE OF PEOPLE : Precursors to a Theory of Mind. The Press of the University of Cambridge, England 2005. M. レゲアステイ, 大藪 泰訳. 乳児の対人感覚の発達. 新曜社, 2014 : 191-203.
- 9) 蒲谷慎介. 前言語期乳児のネガティブ情動表出に対する母親の調律的応答 : 母親の内的作業モデルおよび乳児の気質との関連. *発達心理学研究* 2013 ; 24 (4) : 507-517.
- 10) Legerstee M, Fisher T, Markova G. The development of attention during dyadic and triadic interaction : The role of affect attunement. Paper presented at 35th Annual Meeting of the Jean Piaget Society. Vancouver. Canada, June, 2005. In *Infant's Sense of People Precursors to a Theory of Mind*, Press of the University of Cambridge, England. 2005. M. レゲアステイ, 大藪 泰訳. 乳児の対人感覚の発達. 新曜社, 2014 : 187-206.
- 11) Nadel J, Croue S, Mattinger MJ, et al. Do children with autism have expectancies about the social behavior of unfamiliar people ? *Autism* 2000;4(2) : 133-145.
- 12) Field T, Sanders C, Nadel J. Children with autism display more social behaviors after repeated imitation Session. *Autism* 2001 ; 5 (3) : 317-323.
- 13) 伊藤良子, 近藤清美, 木原久美子, 他. 母子の情動的交流遊びが自他認識とコミュニケーション活動に果たす役割 : 自閉的障害が疑われた幼児に対する集団指導での母子遊びを中心に. *特殊教育研究施設報告* 1991 ; 40 : 95-103.
- 14) Siller M, Sigman M. The Behaviors of Parents of Children with Autism Predict the Subsequent Development of Their Children's Communication. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2002;32(2) : 77-89.
- 15) 井手裕子. 保健所における母親の心理危機状況への介入に関する一考察—言葉遅れを主訴として来所した母子の事例を通して—. *金城学院大学心理臨床相談室紀要* 2010 ; 10 : 3-11.
- 16) 黒木美紗, 大神英裕. 共同注意行動尺度の標準化. *九州大学心理学研究* 2003 ; 4 : 203-213.
- 17) 小椋たみ子, 平井純子, 増田珠己, 他. 母親の音声・言語模倣と子どもの言語発達の関係. *日本教育心理学会第56回総会発表論文集*, 2014 : 830.
- 18) Bruner JS. The intentionality of referring. In Zelazo P, Astington JW, Eds. *Developing Theories of intention : Social understanding and self-control* Mahwah, NJ, Erlbaum, 1999 : 329-339.
- 19) Legerstee M, Van Beek Y, Varghese M. Effects of maintaining and redirecting infant attention on the production of referential communication in in-

- fants with and without Down syndrome. *Journal of Child Language* 2002 ; 29 : 23-48.
- 20) Sigman M, Kasari C. Joint attention across contexts in normal and autistic children. In Moore C, Dunham PJ, Eds. *Joint Attention : Its Origins and Role in Development*. 1995. ムーア C, ダンハン PJ. 大神英裕監訳. ジョイント・アテンション心の起源とその発達を探る. ナカニシヤ出版, 1999 : 179-193.
- 21) Tomasello M. *The Cultural Origins of Human Cognition* Harvard University Press 1999. マイケル・トマセロ. 大堀壽夫, 中澤恒子, 西村義樹, 他訳. 心とことばの起源を探る・文化と認知. 勁草書房, 2006 : 127-177.
- 22) Tomasello M, Todd J. Joint attention and lexical acquisition style. *First Language* 1983 ; 4 : 197-212.

[Summary]

The purpose of this study was to discuss a correlation between changes of forms and frequency of maternal affect mirroring and phases of infants' language development.

The subjects were 559 mothers who took a health examination of their infants. By a questionnaire, they

were asked about the frequency of maternal affect mirroring (commentary, represent, attention, and imitation) and the phase of infants' language development (vocalization, pointing, speech, etc.).

The result was showed that the frequency of attention increased along with infants' monthly development, but that of imitation decreased, and that in terms of the correlation with a phase of infants' language development, there were (+) correlation with the phase of 18 months old (attention, commentary and represent versus beginning time (month?) "child responded to mother's request" and attention and commentary versus beginning time "joint attention"), and (-) correlation with that of 3 month old (commentary and represent versus beginning time "vocalizing to people") and 24 months old (attention versus beginning month "carering behavior" and "treating behavior").

Thus, it was considered that maternal affect mirroring was very important and useful especially during sensitive phases of infants' language development.

[Key words]

mirroring, mother and child relationship, infant, language development